

好色物の世界 西鶴入門 (上)

暉峻康隆



NHKブックス

341

暉峻康隆（てるおか・やすたか）

1908年 鹿児島県に生まれる

1930年 早稲田大学卒

現 在 早稲田大学名誉教授

専 攻 日本近世文学

主なる著者 『西鶴評論と研究』『定本西鶴全集』

『現代語訳・西鶴全集』

NHKブックス 341

検印廃止

好色物の世界 西鶴入門（上）

昭和54年4月20日 第1刷発行

著 者 暉 峻 康 隆

発行者 藤 根 井 和 夫

印刷 三和印刷株式会社

製本 石 津 製 本

装幀 栃折久美子

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町 41-1

郵便番号150 振替東京1-49701

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

好色物の世界(上)

西鶴入門

暉峻康隆



NHKブックス

341



西鶴肖像（一品筆）久保克尊氏藏

好色物の世界（上）

西鶴入門

まえがき

昭和五十二年六月のNHK函館放送局ホールにおける第一回公開講演を皮切りに、十三回をもって終了しました、西鶴の初期を画する『好色物シリーズ』の講読を、活字にしてお目かけられる運びとなりました。

西鶴を読みはじめて五十年、戦前・戦後を通じての初期の二十年は、学界における西鶴研究もまだ緒しよについたばかりだったので、資料の収集と刊行に明け暮れていました。学友野間光辰と協力してまとめた『定本西鶴全集』（十四巻十五冊）がそれです。当時は翻刻と難解な用語の注解に追われ、文学として鑑賞するゆとりは、あまりありませんでした。その後、文章を味わい、作品をいかに正しく読みこなすかに意を用いるようになり、十八年がかりで仕上げたのが、『現代語訳・西鶴全集』（十二巻）です。

西鶴のすべてが頭にはいり、大学での講義も楽しくなってきたと思ったら、早くも時間切れ、五十三年三月に停年退職がやって来ました。この放送は、私の早稲田大学における最終講義に当たるわけです。

放送に当たっては、私の西鶴文学についての考えのすべてを、学術論文的にでなく、世話講釈をやるつもりでお話しました。だがこれまでの西鶴研究を総括するだけでは、話しいがありませんので、二、三の新しい視点も用意しました。たとえば従来ほとんど無視されてきた西鶴文学における時間設定、西鶴が小説でどのように時間を処理しているかという、小説を文学として鑑賞するのに欠いてはならない視点を留意したのも、その一つです。私のこの仕事は、大学の研究室と教室から、西鶴文学を解放することに役立てば、と念じております。

しかし皆さんも御存じのように、西鶴の作家としての成熟、作品の文学的な結晶度は、“好色物シリーズ”が終った時点から出発した、晩年を画する“町人物シリーズ”に求められるのです。いずれ近い機会にお目にかけるつもりです。御期待ください。

暉 峻 康 隆

目次

まえがき

一 元禄文芸復興の基盤 11

好色の意味 宗教時代から道德時代へ

仏教美術の終焉 封建的新体制

文盲追放 民衆詩俳諧の登場

古典解放 出版技術の確立

二 西鶴の時代と生涯 35

世界的古典作家の西鶴 西鶴と芭蕉と近松

鶴永時代 憂世から浮世へ

阿蘭陀西鶴 西鶴の新人意識

女房追善の一日独吟千句 詩から散文へ

三 『好色一代男』の世界(一) 67

——テーマと構想——

『一代男』のテーマ 古典のパロディ俗源氏

数字の遊び 『一代男』の時間設定

後半四巻の時間処理 元禄町人の美意識

四 『好色一代男』の世界(二) 93

——世之介の足どり——

初期作品の文体

サラブレット世之介の登場

少年世之介の奮闘 貴種流離

古典のパロディ 第二弾

五 『好色一代男』の世界(三) 121

——美の審判者——

粹のエスプリ 仕置者世之介

見果てぬ夢を追って

六 『諸艶大鑑(好色二代男)』 149

——粹からの脱出——

サブタイトル「二代男」について

序章におけるパロディ

『諸艶大鑑』の新視点 狂言のパロディ

不毛の愛 訣別の章

無頼の青春への挽歌

巻末附録 181

一

元禄文芸復興の基盤

好色の意味

きびしい道徳や法律時代を迎えました近世江戸時代の一般市民社会の男女が、どのように愛し合い、傷つき、悲しんだか——それをリアルに書き残してくれました、日本における最初の市民作家である、十七世紀末の井原西鶴の作品を、これから十三回にわたって、鑑賞し評論いたすことになります。

西鶴の初期の作品群である「好色物シリーズ」は、『好色一代男』『好色五人女』『好色一代女』などと、おおむね「好色」というタイトルがついております。この言葉について、まだまだ誤解があるようですから、一通り私の考えを申し述べたいと存じます。

「好色」といいますと、現代では、「あのひと好色よ」なんていわれると、何となくぐあいが悪いです。江戸時代までは「恋愛」なんていうことはなかったのです。だから「好色」ということばで、あらゆる男女関係を表現するわけです。

『万葉集』以来長い間、和歌は漢詩文にとってかわられて、片寄せられておりましたので、『古今集』の序文のなかに、「和歌は好色の家に埋もれ木となりて」というようなことが書いてあります。大和ことばでいう「色ごのみ」の音読なんです。

色ごのみとか好色とかいうことばは、王朝時代は褒めことばなのです。「この君は色ごのみにて

ましませば」というように。兼好法師も『徒然草』のなかで「色このまざらん男は玉の盃の底なき心地す」といつています。好色でない人は底の抜けたグラスのようなものだというわけですから、どうかみなさんも、情趣を重んずる底のあるグラスであってほしいと思います。

これからお話しします『好色一代男』『好色五人女』『好色一代女』など、これもそのつど、ケース・バイ・ケースで「好色」ということばの意味、内容が違っていきます。それは、作品を鑑賞するときにそのつど申し上げたいと思います。

宗教時代から道徳時代へ

十六世紀までの日本人と十七世紀以後——江戸時代以後の日本人とどこが一番根本的に違ったか。まず第一に十六世紀までの日本人の精神生活を支配したのは宗教（仏教）でした。仏教は、あまり現実的な人間関係をかれこれいわないのです。とにかく現実の世界はすべて、人間の欲望がうず巻いているので、これは全部ダメなんだ、そんなところをウロウロしているからいつまでたっても憎んだり悲しんだり怒ったりするのだから、そういう煩惱から解放されなければいけない、というのが仏教です。

日本の仏教は、男女の愛欲なんか、当局は一切関知しないという立場にあります。修行中の坊さんだけは、邪淫戒じやいんかいとか女人禁制などとやかましくいいましたけど、一般の信者である国民大衆の愛

とか性については、一切関係しませんでした。そこらもヨーロッパの文学と日本の文学の大きな違いの一つです。ヨーロッパでは、特にカソリックその他のキリスト教は、一般の信者の愛や性について実にきびしいのです。「汝姦淫することなかれ」というのは、牧師だけじゃなくて、一般の市民にもきびしく要求します。

だから、ヨーロッパの文学で愛欲の解放、性の解放というようなテーマを作家が取上げるとしますと、まず第一に神と対決しなければなりません。神の戒めたもうたことをわたしはこれからぶっこわすのだ、と。神に対する恐れや抵抗からはじまっています。

日本の文学には、そういう形で神さまや仏さまは登場しません。それどころか、日本人は、自分の恋がうまくいかないと、神さまや仏さまに願かけする始末です。むこうとあべこべです。日本の文学では、恋に悩んだあげく神仏にすがるという場面はあっても、はじめに神仏と対決するという場面はありません。

支配階級がつくった道徳や法律と対決するところから出発するのが日本の文学です。自分たちの愛や性を完成するには、法律とか道徳と対決しなければなりません。それは実は十七世紀以後の江戸時代のことなのです。それ以前の日本の文学は、仏教の時代ですから、すべて、愛欲のために悩み苦しむ悶えるのは、それは人間の業であるという、それだけです。

業ということは、いいも悪いもないのです。わかっちゃいるけどやめられない、というのが業なのです。われわれはみんな、業の深い人間で、こうしちゃいかん、ああしちゃいかんとわかってい